

プリミティヴィズム再考

Le primitivisme en question

稲賀 繁美 Shigemi INAGA

大久保恭子著『<プリミティヴィズム>と<プリミティヴィズム> 文化の境界をめぐるダイナミズム』(三元社、2009年)の書評という形をかりて、表題の話題を取り上げる。「プリミティヴィズム」という言葉が日本の美術研究の世界で流通するようになったのは、1984年のニューヨーク近代美術館 (MoMA) でウィリアム・ルービン William Rubin の監修により *Primitivism in 20th Century Art* という巨大な展覧会が開催され、さらにその展覧会図録が吉田憲司を訳者代表として『二十世紀美術におけるプリミティヴィズム』(淡交社、1995年)として刊行されてから、とってよからう。実際には Primitivism という用語は Robert

Goldwater の博士論文に基づく著書 *Primitivism in Modern Art* (1938年) によって英語圏に根付いたとってよい。

大久保博士の著作は、この用語を焦点として収斂した文化交渉史・解釈上の出来事にきわめて骨太な見取り図を与えた著作といえる。そこに孕まれる焦点を3点に集約したい。まず著者は、ゴールドウォーターがこの著作のなかでヴィルヘルム・ヴォーリングガーの『抽象と感情移入』(1908) を利用しつつ、そこに恣意的な概念操作を施したことを指摘する。即ちドイツの美学者がもっぱら古代エジプトを対象として、文明の初期段階に幾何学的様式を見出したのに対して、米国の美術史家は、これを黒人アフリカ世

界も含む Primitive art の抽象志向へと拡大適用した。これがヴォーリンガーの価値観を裏切る逸脱だったことは著者の指摘するとおり。だが、実はヴォーリンガー自らも A・リーグルの『様式の問題』*Stilfragen* (1893 年) を下敷きと同様の操作を施している。即ち幾何学的様式を抽象作用 *Abstraktion* 一般と同一視し、これを Primitif な文化段階に結び付けている。ここから「幾何学的抽象」を未開芸術と結びつけ立体主義 *Cubisme* を寿ぐ北米 *Primitivism* 特有の観念連合の成立背景がより明確となろう。

第二に本書は、先行する *Orientalism*、*Japonisme* (これらが学術的用語として定着した経緯も問題を含む) と *Primitivism* の位相差を明確にする。地理上の辺境への拡張、欧米の植民地獲得競争が地球全体を覆い尽くした段階で、自らの内奥への探索、無意識への下降が始まり、*Primitivism* を特徴づける。とりわけ顕著なのが *Surréalisme* といえるだろう。評者は、《ラオコーン》像の人間と大蛇の葛藤の原型を

北米原住民ホピの蛇儀礼に見たアビ・ヴァールブルク *Abi Warburg* の「情念定型」を、20 世紀欧米社会の「原始社会」観=*Primitivism* の系譜に位置づける可能性を提起した。

第三に本書はルービン監修の展覧会が巻き起こした論争に言及する。その経緯は吉田憲司の『<文化>の発見』にも明快な分析があり、ほぼ議論を尽くしている。だが評者としては MoMA の企画の最大の欠陥、看過された側面は、表象 *Representation* の美学からの離脱を画策した 20 世紀初頭の欧州の前衛の試みを、表象の論理によって解読しようとする学術上の反動性にある、と考える。ピカソがアンドレ・マルローに対して《アヴィニヨンの娘たち》を「最初の悪魔払いの絵」と述べたことの真意。発表では、「情念定型」に照らして「魔術」の次元を探るための方法論上の提言を行った。

(International Research Center
for Japanese Studies)